

聖書：マタイ 14：22～36

説教題：しっかりしなさい、わたしだ

日時：2019年9月1日（朝拝）

前回は5千人の給食の記事について見ました。それに続いて今日の箇所に記載されているのが、このガリラヤ湖上の出来事です。イエス様は5千人の給食のみわざの後、すぐに弟子たちを舟に乗り込ませて向こう岸へ渡るようにされました。なぜそうされたのでしょうか。手掛かりになるのは並行記事であるヨハネの福音書6章15節の言葉です。そこに5千人の給食の出来事を経て、人々がイエス様を王にするため連れて行こうと熱狂的な状態になっていたことが記されています。イエス様はそれを知って、そのことを避ける行動を取られたことがここに書かれています。ですからここでも弟子たちがこの群衆に影響されないように、その熱狂の渦に巻き込まれないようにとイエス様はこのように行動されたのだと思われます。イエス様は人々の人気を得て地上的な王様になるために、この世に来たわけではありません。そこで弟子たちを強いて舟に乗り込ませて送り出したのです。これは強い言葉です。ある意味で無理やりにそうしたのです。もしかすると弟子たちは5千人の給食の奇跡を体験して、この素晴らしい状況になおとどまっていたという思いを持っていたのかもしれませんが。高まる民衆の熱気の中で、この興奮する状態にもうしばらくとどまっていたいと。しかしイエス様はここにある危険を察知して、半ば強制的に弟子たちを舟に乗り込ませて向こう岸へと送り出されたのです。そしてご自身は一人で祈るために山に登られました。この5千人の給食は、ある意味でイエス様の地上の生涯における絶頂期の出来事です。十字架刑にかかる約一年前、人々のイエス様に対する期待や人気は、これまでにない高い状態にありました。イエス様はその状況でなお祈る必要を覚えられたわけです。父なる神と向き合い、父なる神と交わって、ご自分の使命は何であるか、これからどのように歩むべきであるのか、もう一度確認をされた。このような作業を大切にされたイエス様のお姿を私たちはここにも見ることができます。

さて、この間に弟子たちは大変な状況になっていました。彼らの乗った舟は向かい風のために波に悩まされていました。夕方に湖の岸を離れたはずなのに、25節を見ると、夜明けが近づいた頃になってもまだ湖の上にいることが分かります。欄外の25を見ると、直訳では「第四の夜回り」という表現になっていて、当時は日没から夜明けまでを4分割して考えましたので、第四の夜回りとは午前3時～6時となります。ですから夕

方に出発して、夜明けが近づいてもまだ向こう岸にたどり着かないという大変な状況にあったわけです。なぜこんなことになったのでしょうか。もし弟子たちがイエス様の言うことに聞き従わず、勝手に沖へと漕ぎ出したなら、これは不従順のせいだということになります。しかしなぜこの時、彼らはガリラヤ湖の上にいたのでしょうか。それは先に見たようにイエス様に強いられたからです。彼らはイエス様に従ったために、この時、この状況にあったのです。

ここから私たちが様々な悩みに会う時、それは必ずしも自分が何か悪いことをしたからではないことを知ります。私としてはただイエス様に従っているだけなのに、苦しみにあっているという場合があるということです。言い方を換えれば、正しく信じていれば良いことだけが起るとはキリスト教は言わない。イエス様に従っているのに悩みの中にある、向かい風の逆境の中にある、さっぱり向こう岸にたどり着けない、夜通しもがいても目的地に到達できない。そういうことがあるということです。そこには何か神様のお考えがあるのでしょうか。ここでもイエス様はこのことを通して大切な学びを弟子たちに導いて行かれます。

さて困難な状況にある彼らを、いつまでもそのままにはしておけません。彼らのところへ近付いて行かれます。湖の上を歩いて！です。この箇所について思い起こすのは、大学生の頃、一般の書店に聖書の解説書が置いてあったことに驚いて、それを手にとってパラパラッとめくった時のことです。この箇所についてその注解書は、舟に乗っている弟子たちは岸辺を歩いていたイエス様を沖の方から見たので、まるで水の上を歩いているように見えたのだろうと解説していました。それを読んで私は本当にびっくりし、また激しいショックを覚えました。何と書くことを書いているのか！と。それは今から考えると、聖書から奇跡的な要素を割り引いて考えるいわゆるリベラルな立場に立つ人が書いた本で、私たちの聖書の読み方とは異なるものです。自然界をも治める力を持つイエス様なら、たとえ人間の頭で考えられないことでも、それはできるとすることは少しもおかしなことではありません。このイエス様を見て弟子たちは怯えました。幽霊だ！と言って、恐ろしさのあまり叫びました。これは理解できます。誰かが水の上を歩いて近付いて来るなんて、とても信じられません。しかも夜明けが近づいた、まだ暗い時間です。目を凝らして見ると、この強風の中、近づいて来る人影がある。それを見つめたら私たちでもパニック状態になると思います。

そんな彼らにイエス様は言われました。「しっかりしなさい。わたしだ。恐れることはない。」 実にこの言葉こそ、私たちが今日、自分の心にしっかり留めたい言葉です。私たちも様々な困難の中であえぐ時があります。まさに人生の波が次々に打ち寄せる時、大風の向かい風が吹き付けて来る時、あるいは長い夜の見えない格闘が続く時、……。そんな中、良く分からない、得体の知れない何かが近づいて来ることを感じて、叫び声をあげたくなる時があるでしょう。そういう時、イエス様は私たちに語ってくださいます。「しっかりしなさい。」 これは決してこの状況は何でもないよと言っている言葉ではありません。危機的状況がないわけではありません。それはそこにあります。しかしイエス様がそのただ中でともにいてくださって「あなたと一緒にいるのはわたしだ。だからしっかりしなさい。」と言ってください。その方を見つめるなら恐れる必要はない。最初は自分たちが乗るボートにイエス様は乗っていらっしゃらないかと思っていたかもしれません。そして嵐の中で、助け手がどこにも見えなくて不安だったかもしれません。しかし私たちが出会う様々な困難のただ中にイエス様は来てくださって、「わたしだ」と言ってください。その方の声に聞き、その方を見据えるなら大丈夫。恐れる必要はない。しっかりしているということが出来ます。その方によって、大波の状況、大風が吹き荒れる状況を乗り越えることができるのです。このイエス様の声を私たちは様々な格闘のただ中で聞く者でありたいのです。

さて、ここでイエス様をそのまま舟にお迎えすればすべてが終わりとなりそうなところですが、28節からマタイの福音書独特の記事が続きます。何とそこでペテロがイエス様に願います。「主よ。あなたでしたら、私に命じて、水の上を歩いてあなたのところに行かせてください。」と。なぜ彼はこんなことをイエス様に願ったのでしょうか。その理由は書いていませんので、はっきりとしたことは分かりませんが、ある注解者はこう言っています。ペテロをはじめ弟子たちは5千人の給食を通して、イエス様の素晴らしいみわざに直接的に関わる者とさせていただいた。そこでペテロはここでもこの驚くべきみわざに自分が直接的に関係する者、それに参加する者とさせていただきたいと考えたのだろうと。それにしてもペテロらしい願い出です。彼は漁師でしたから、ガリラヤ湖のこの状況がとても危険なものであることは良く承知していたでしょう。しかしイエス様によるならば、この私でも、この状況で水の上を歩くことができる。そうペテロは信じたのです。そして何とイエス様もこの願いを聞かれて、「来なさい」と言われました。するとどうだったでしょう。何と本当にペテロは水の上を歩いたというのです！人類の歴史上、このように裸足で水の上を歩いた人は後にも先にも彼一人しかいな

いのではないのでしょうか。

ところがそうできたのも束の間、次の瞬間に彼は沈み始めます。なぜでしょうか。それは 30 節に「強風を見て怖くなった」からと記されています。別な言い方をすれば、イエス様から目を離してしまったからです。これは私たちにとっても教訓的なエピソードではないのでしょうか。私たちもイエス様を見つめている限り、水の上を歩くことができます。もちろん字義的な意味ではありません。しかし私たちの信仰の歩みは水の上を歩くようなことにたとえられるのではないのでしょうか。人間の頭で考えれば信じられないようなこと、ただイエス様を信じることにより、私たちはこの世の人から見れば、まさに水の上を歩くような不思議な歩みをさせていただいていると言えます。そのようにしてイエス様を信じて一步を踏み出したにもかかわらず、私たちがイエス様よりも周りの状況に多く目を注ぎ、そのことに心が多く捕らわれるとどうなるでしょう。私たちもペテロのようにドボドボと沈み始めるのです。イエス様への信仰が小さくなり、周りの状況がどんどん大きくなってしまふ。こんな強風が吹いては、信仰によって歩もうとしても無理なのではないか、と考えるてしまふ。そうして沈み始めるのです。これもまた私たちが経験することではないのでしょうか。いかにイエス様から目を離さず、イエス様を見つめて歩み続けることが信仰生活において大事かを教えられます。

しかし慰め深い事実は、イエス様はここでペテロを沈んで行くままにされなかったことです。もし私たちの信仰にすべてがかかっているとしたら、私たちは希望を持ってません。イエス様もペテロを見て、「あ～沈んで行く、沈んで行く。信仰の薄き者よ。これであなたともお別れです！」と見過ごすしかなくなります。しかしそうではありませんでした。イエス様は沈みかけたペテロにすぐ手を伸ばして、引き上げてくださいました。人間がイエス様をつかんで自分を救うのではなく、イエス様が私たちをがっちりつかんでくださるのです。そして引き揚げてくださるのです。まさにこのようなイエス様の憐れみの御手によって、今日このように支えられ、立たせていただいている私たちではないのでしょうか。そのために最低限必要なのは、「主よ、助けてください！」という叫びです。不十分な者でしかなくても、主に助けを呼び求めるこの叫びがあること。この声を主は聞いてくださり、救ってくださるのです。この主への叫びさえあるなら、あわれみの御手は伸ばされるのです。まさにこうした小さな叫びによって、今日もこのように生かしていただいている私たちです。

二人が舟に乗り込むと風はやみました。舟の中にいた弟子たちは「まことに、あなたは神の子です」と言って、イエス様を礼拝しました。こうしてイエス様に対する弟子たちの理解は一段と深まったのです。ここでの「神の子」という告白は、今日私たちが教理的に理解しているキリスト二性一人格というレベルまで達したということではありません。後に 16 章でイエス様は、あなたがたはわたしをだれだと言いますかと弟子たちに問うて、ペテロが代表して「あなたは生ける神の御子キリストです」と告白します。その告白のレベルまでは今日の箇所時点ではまだ行っていません。その手前、それにつながるような前段階の告白と見るべきでしょう。しかし 5 千人の給食と今日の箇所の出来事を通して、弟子たちはイエス様を新しいレベルで知るようにと導かれたのです。

最後の 34～36 節は、イエス様がもたらす祝福を改めて記したものです。対岸に着くと、人々は周辺の地域にくまなく知らせ、多くの人々がイエス様のところにやって来ました。イエス様はあらゆる人々を癒やされました。衣の房にさわるだけでそうになりました。イエス様を通して働く力があまりに大きかったので、それだけで十分だったのです。これはイエス様がやがてもたらす完全な神の国の祝福の前味となるものです。イエス様はやがての十字架のみわざを通して、これらの出来事が指し示す最終的な神の国の祝福に信じる者たちを生かしてくださるのです。

以上の御言葉から私たちも自分に当てはめて益を受けたいと思います。私たちも様々な嵐に直面することがあると思います。今、そのただ中にある方もいらっしゃるかもしれませんが。人生の大波、強風、向かい風、目的地の見えない、いつまで続くのかと思われる格闘、……。そんな時、こう語ってそばにいてくださるイエス様の言葉をいつも聞く者でありたいと思います。「しっかりしなさい。わたしだ。恐れることはない。」このイエス様をしっかり見つめているなら私は大丈夫。そのイエス様を見ていれば、水の上さえ歩くことができます。神の恵みの力により、その問題を乗り越え、その問題の上を闊歩して渡って行くことさえできる。たとえその途中で私の信仰の不完全さゆえに沈むようなことがあっても、イエス様に向かって叫ぶことさえ忘れなければ、イエス様は私をグイッと捕まえて、沈まないように引き上げてくださる。その主に感謝し、また信頼して、どんな時も主の名を呼ぶ者でありたいと思います。そして人生の大波を乗り越えて、向こう岸に無事着くことができ、全き救いと本来の祝福の回復へと至る信仰者に備えられたこの道を、この週、この月も歩ませていただきたいと思います。